



理事長挨拶— “Change”から “Development”へ

佐藤 正美

(東京慈恵会医科大学)

昨年の11月に発行されたニュースレターでは、「理事長挨拶—“Change”」というタイトルで原稿を書かせていただきました。今思うと、大それたタイトルだったという思いで恥ずかしくなりますが、「メールによる会員への情報配信、研修会の企画・実施、学会Webサイトのリニューアル」など、理事やワーキングのメンバーのおかげで有言実行でき、ホッと胸をなでおろしています。そして今年のニュースレターは「Development」です。

1995年に本学会が設立し、2024年の学術大会は第30回を迎えました。この30年間で日本の年齢別人口構成比は変化し、社会経済、医療福祉、環境問題、自然災害、感染症など大きく変化しました。人々の健康に貢献できる専門家としての看護職の活動の場は、病院だけではなく施設、在宅、職場、学校などに広がり、また医療職だけではなく介護福祉職との協働が不可欠となりました。また“わが国”だけに視点をあてていたら本質が見えず、地球規模、でとらえなければなりません。この

ような大きな変化の中、人々の健康や安寧へ向けて、看護職はどのように専門性を発揮する必要があるのでしょうか。そして、その専門性を発揮して人々の健康や安寧に貢献するために、看護過程や看護診断はどのように発展する必要があるのでしょうか。少なくとも専門職として、看護職が何に焦点をあてて、何を意図してどう実践しているのか、ということを書き記述することや説明することは必要でしょう。しかし、あまりに壮大な問いに対して、まだ自分自身も十分に考えを整理できておりません。しかし重要なのは、「今」ではなく、望ましい「未来」を描くことであり、未来を考えることであることは確かです。柔軟な発想で、人々の健康や安寧を護る一専門職として、多職種のメンバーと一緒に取り組める、そんな看護専門職でありたい、と改めて考えます。

ようやく、タイムリーに情報を発信できる環境が整いました。Webサイトやメール配信を通じて、各委員会活動などお伝えしやすくなりました。これからが本番です。大事なものは、お伝えするそのメッセージであり、その内容です。

今年度は役員選挙の年です。2020年の会則変更により、評議員そして理事と監事は3年の任期で6年を超えて在任はできないこととなりました。したがって、現在の理事および監事の多くが交代となります。しっかりと次の役員へバトンタッチできるよう、残りの期間を精一杯、取り組んでまいりたいと思います。



第31回 日本看護診断学会学術大会のご案内

【大会テーマ】

もっと活かそう！看護過程・看護診断

大会長 升田 由美子 (旭川医科大学)

はじめに、9月の能登豪雨災害で被災されたみなさまにお見舞い申し上げます。元旦の地震での復旧も十分ではないなかで、不自由な暮らしが続いている方もいらっしゃると思います。1日も早い回復をお祈り申し上げます。

この度、第31回日本看護診断学会学術大会を令和7(2025)年8月2日(土)～3日(日)に北海道旭川市

で開催することとなりました。大会テーマは「もっと活かそう！看護過程・看護診断」といたしました。

今大会のテーマとした看護過程と看護診断は、看護の根幹を成すものです。看護を実践する際に、意図せずとも看護過程を展開し、実践をする臨床の看護師のみなさんにとって「看護過程」はあえて学ぶ必要はないものでしょう。しかし新人看護師や看護学生はいつも「看護過

程」に苦しみ(?)られてはいないでしょうか。「看護診断」はどうですか?いまだに近寄りがたくよくわからない診断名に悩まされているかもしれません。この古くて新しい、そして看護にとって欠かせない「看護過程」と「看護診断」をもっと知ってもらって活用してもらいたい、これが今大会のテーマです。

「看護過程」と「看護診断」は患者さんの個々のニーズを的確に把握し、適切なケアを提供するために不可欠なツールであり、看護師一人ひとりの専門性を体現するとともに、チーム医療における看護師の役割をより明確にするものです。本学術大会では看護過程と看護診断の重要性を改めて確認し、その活用方法について情報交換を行いたいと考えています。看護過程と看護診断に基づいて各自が専門性を活かした看護を実践することで、対象者に質の高いケアを提供することはもちろん、看護師自身のやりがい・働きがいにもつながると確信しています。看護診断を活用することがどのように臨床・教育に

貢献するのか、その意義や魅力についてシンポジウムや教育講演を通してみなさまと共有したいと考えています。また、看護学生のみなさんが看護過程・看護診断についての理解を深める機会にできればと思い、学習コーナーを企画する予定です。他にも交流集会や口演・ポスターセッション等企画中です。一人でも多くの方に参加していただきたいと考えております。

第19回学術大会が旭川市で開催された10年前と比べますと、看護診断を取り巻く状況も変化していると感じています。また、COVID-19の流行以降、医療現場は厳しさを増し、医療・介護ニーズの高度化、高齢化社会の進展、そして深刻な看護師不足は、看護現場に大きな負担を強いております。厳しい医療状況と人材不足という、かつてない課題に直面する今こそ、看護とは何かをこの学術大会で皆様と考えてまいりたいと思います。

北の大地、北海道のほぼ中央に位置する旭川市で皆様にお目にかかれることを楽しみにしております。

第30回 日本看護診断学会学術大会を終えて



第30回日本看護診断学会学術大会 大会長 **笠岡 和子** (関西看護医療大学)

第30回日本看護診断学会学術大会は、神戸国際会議場において、令和6年7月27・28日の2日間開催しました。今回は、今看護診断から離れていく施設が多いと聞く中、

もう一度看護診断について考えてみたい、私たち看護師に必要不可欠な看護の判断(臨床判断)を看護診断に繋げていける場に出来ればと思い、「豊かな援助を導く看護診断の未来」をテーマに挙げました。その看護診断の未来のテーマにふさわしい「看護の未来」というテーマで、南裕子先生にご講演をいただき、今年は関西大阪万博開催の前年でもあるため、関西経済連合会会長・住友電工会長である松本正義氏にもご講演をいただきました。

また今回の学術大会では日本看護診断学会だけではなく他の看護学会とも繋がりを持っていきたいとの考えのもと、日本看護科学学会、日本看護技術学会、日本小児看護学会からの講演をお願いし、看護技術学会の大久保暢子先生による「看護学における学術用語の構築と普及

について」のご講演をいただき、日本看護技術学会の迫田綾子先生と栗田愛先生に、今開発されている看護介入技術についてご講演をいただきました。この看護介入技術については今回の大会長講演の中でも申しましたが、看護診断を考えると「看護介入技術」は「臨床判断」とともに必要不可欠なものです。今回のテーマの課題でもあるため、大学院等で行っている介入研究の発表も入れました。一人でも多くの人に今臨床で使える看護介入技術について考えてもらえる場になったのであれば幸いです。また、日本小児看護学会の濱田米紀先生には、「子どもの『頑張る力』を引き出す看護」として小児に関する看護の在り方を示唆するご講演をいただきました。日本看護科学学会では共催、日本看護技術学会は後援をいただき、その学会員の方も多く参加をいただきました。お礼申し上げます。これからも他の看護学会との連携を持ち、お互いの今の活動を共有していける場に繋がればと期待・希望しています。他にもシンポジウム、交流集会、口演、ポスターセッションに多くの発表をいただき、どこの会場でも真剣に耳を傾ける参加者を見ることができました。

また、今回は、日本看護診断学会の30周年の記念の年でもあり、30周年記念事業として、3代の理事長による座談会「実践を拓く看護診断の新たな可能性」や看護管理者、看護教育者・研究者でのシンポジウム「看護管理者が語る実践を拓く看護診断の新たな可能性」「看護教育者・研究者が語る実践を拓く看護診断の新たな可能性」のシンポジウムも入れました。スケジュールを組むのに大変で何度も変更を繰り返しましたが、その甲斐もあり盛大に開催できたと思っています。日本看護診断学会の将来構想委員の先生方にも感謝申し上げます。

今回の第30回の学術大会の企画当初は、まだまだコロナが思ったほど終息していない現状もあり、またコロナ禍が何年も続いたことにより、企画委員全員が本当に対面でいいのだろうかと考え、参加者が集まるだろうかとの不安の中で日々を過ごしてまいりました。途中から

オンデマンドの開催も取り入れましたが、今回の学術大会では当日の参加者が45名と揮わず、終了のその時まで不安は続きました。しかし、会員・非会員合わせて282名、学生94名の参加を得ることができました。予定していた参加者数には届かなかったものの、参加した方々から「とても充実した学会でしたね」「とてもよかった」との意見をいただき、閉会のあいさつをする時には不安はなく、とても平静な気持ちで閉会を迎えることができました。

今回の第30回の日本看護診断学会学術大会が無事に終わることができたことは、ひとえに多くの皆様の協力ご支援があったからだと思っています。遠くから、忙しい中参加していただいた皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

第30回 日本看護診断学会学術大会に参加して

京都先端科学大学健康医療学部 西田 直子

日本看護診断学会第30回学術大会のテーマは「豊かな援助を導く看護診断の未来」で、笠岡和子大会長の講演でも適格な看護診断が豊かな援助を導くこと、その問題を解決できる介入技術がなければ問題の解決には繋がらないことが強調されました。それを受けて、シンポジウムでは「看護技術の技術開発とエビデンスの構築に向けての活動と実績」が企画され、日本看護技術学会技術研究成果検討委員会食べるケア班長の迫田綾子先生による「食事ケア；誤嚥を防ぐ食事時のポジショニング教育プログラムの開発と伝承効果」というテーマで、食事姿勢などの観察が重要で、患者の状態に応じた食事姿勢をとることで、自分らしく人として尊厳と権利を守られた倫理的ケアとなり、食べられる介護技術につながること

が話されました。また、排泄ケア班長の栗田愛先生からは「安全で効果的な排便を促す新規“介入技術パッケージ”の開発」というテーマで、排便がスムーズにできない対象者にバイタルサイン測定、フィジカルイグザムを行い、介入技術パッケージにしたがってプロトタイプを決定して各判断項目を採用して、必要な援助技術を判断し介入する技術について話されました。そして、看護問題の解決に繋げるための介入技術の開発、介入技術のエビデンスや研究の進め方について学ぶことができました。今後の看護介入の技術開発や研究に役立つ内容で、豊かな援助を導くための方略を学べる大会であったと思います。

第29回 日本看護診断学会学術大会に参加して

徳島産業保健総合支援センター 倉田 紀美子

看護診断学会学術大会で発表する機会をいただき、自身の研究を振り返ることができました。私は、生活行動の一部である立つ、歩くを含めた活動への関与として、看護介入、脳血管疾患患者の尖足改善の一方法として、足部に筋膜リリースを行いました。結果、軟部組織は柔軟性を取り戻し、足関節背屈角度は拡大しました。その後、継続という課題に対し、看護ケアとして行うにはど

うすればいいか、そのことばかり考えていました。発表後質疑の場で、「いつまで筋膜リリースを行うのですか」と質問をいただき、私は改めて、患者様にどうなってほしいのか、私の目標は、患者様が安全にベッドから車いすに移動できること、そしてトイレに、洗面所に行けるなど、自身でできることが増えることであったと気づくことができました。

日本看護技術学会の迫田先生の食事ケアは、姿勢の改善で、患者様の持てる力を引き出すことができる、私たちの楽しみの一つである食事を自分で食べることができる、ポジショニングの可能性に感激しました。そして、改めて看護の楽しさを感じることができました。

病院で、施設で、在宅で、できないと諦めている患者様があります。いえ諦めている看護師がいます。看護はチームワークです。みんなで自分たちが行っている看護を見直し、前に進む努力をしようと思った大会でした。

国際交流委員会からのお知らせ

国際交流委員会 委員長 曾田 陽子 (愛知県立大学)

NANDA-I International Nursing Diagnoses Definitions & Classification, 2024-2026が刊行されました。軸(Axis)内・間での用語の重複の見直しや、従来の7軸にSituational constraint が追加され8軸に変更、また、すべての診断ラベルや用語を米国医学図書館のシソーラスであるMeSHにマッピングする作業、可能な限りのジェンダーニュートラルな用語の使用などが行われました。

ACENDIO Conference 2025は2025年3月27-29日にオランダで、NANDA-I Conference 2025は6月3-6日にポルトガルで開催されます。看護師の教育や実践を変革する上での看護用語の標準化の重要性などについて、エビデンスに基づいてグローバルに討議される予定です。

日本看護診断学会研究助成のお知らせ

研究助成選考委員会 委員長 長家 智子 (第一薬科大学)

日本看護診断学会には、日本における看護診断を発展させ、看護の質の向上を図ることを目的とした「研究助成制度」があり、50万円を上限として研究費を助成しています。申請手続きは、日本看護診断学会ホームページ (<http://jsnd.umin.jp/>)にある研究助成をクリックしていただき、研究助成募集要項を確認いただき、「研究助成申請書」「研究経費支出計画書」を作成し、日本看護診断学会事務局に送ってください。申請する研究は、看護実践において普段取り組んでいることで、看護診断だけでなく看護過程・臨床判断など幅広い分野で募集します。

助成を受けた場合、研究成果を日本看護診断学会学術集大会で発表して頂くとともに、学術誌へ投稿して頂くことになります。これは、他施設の看護の質の向上も図っていくという研究成果による社会貢献を目的としています。2025年度の申請締め切りは、2025年8月末です。皆様からの応募をお待ちしています。

論文を募集しています！

編集委員会 委員長 黒田 裕子 (湘南鎌倉医療大学大学院)

編集委員会では、看護診断および看護過程や看護アセスメント等に関連する未発表の原著、総説、研究報告、実践報告、事例報告、資料の論文を随時、募集しています。提出期限は毎年10月末となっております。会誌『看護診断』は、2022年3月より電子投稿となっております。詳しくは学会ホームページをご覧ください。

看護実践の貴重な資源となりうる論文の投稿を心よりお待ちしております。

入会のご案内

本学会は適切な看護を行うために、看護診断ならびに介入・成果に関する研究・開発・検証を行うとともに、会員相互の交流を促進し、また看護診断に関する国際的な情報交換や交流を行うことによって看護の進歩向上に貢献することを目的としています。是非、多くの方々のご入会をお待ちいたしております。ご入会に関しましては私共のホームページ(<http://jsnd.umin.jp/>)入会案内の新規入会よりオンラインにてお申込みくださいますようお願い申し上げます。

入会手続きに関するご不明点は 日本看護診断学会事務局

TEL:03-3352-6223 E-mail:jsnd@convention-access.comまでご連絡をお願いいたします。

日本看護診断学会ニュースレター 第27号

発行日 2024年11月1日

編集委員/黒田裕子、明石恵子、福田和明、古川秀敏、和田美也子、山田紋子

